



TITLE:

大橋隆憲先生と社会階級構成論・ 障害者統計論

AUTHOR(S):

野澤, 正徳

CITATION:

野澤, 正徳. 大橋隆憲先生と社会階級構成論・障害者統計論. 経済論叢
1983, 131(6): 413-421

ISSUE DATE:

1983-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/133977>

RIGHT:

經濟論叢

第131卷 第6号

哀 辭

故大橋隆憲名誉教授遺影および略歴

QCサークル活動と社会・技術システム論

による責任ある自律的作業集団……………赤 岡 功 1

賃金上昇，間接税および石油ショックの

計量分析……………大 西 広 26

再生産と利潤率……………黒 木 龍 三 49

資本の国際化の方法的模索(下)……………奥 村 和 久 71

書 評

ナチ・レジームの社会史研究の一動向

——T. W. Mason, *Sozialpolitik im Dritten Reich. Arbeiterklasse und Volksgemeinschaft*, Opladen 1977 をめぐって——

……………後 藤 俊 明 95

追 憶 文

大橋隆憲先生と統計学学問論……………野 村 良 樹 110

大橋隆憲先生と社会階級構成論・

障害者統計論……………野 澤 正 徳 119

昭和58年 6 月

京 都 大 学 經 済 学 會

大橋隆憲先生と社会階級構成論・障害者統計論

野 澤 正 徳

大橋先生を、衣笠・竜安寺のそばのご自宅にお訪ねすると、先生は、たいてい白いシャツ、白いトレパンのふだん着姿で玄関にあらわれ、私たちを居室まで案内して下さいました。若い頃は二階の書斎に入られたが、近頃は一階の和室のことが多くなった。床の間には、小さな観音さまの像が安置してあった。いつか像の由来をたずねると、この家は、実は、青蓮寺というお寺であり、仏像は聖観音といて、お寺のご本尊さまだ、というお話をうかがって驚いたことがある。先生は、優美な観音さまのかたわらにお座りになって、おびたしい資料のファイル・辞書などにとりかこまれながら、戦争を企てるものへの憤り、財界家系図の分析、自衛隊とのやりとりなどを、おだやかな笑顔と、物静かな、しかし熱っぽい口調で語られたものだった。

その先生とお別れしてから、はや2ヶ月にもなる。すでに私は、先生を偲ぶ一つの断章を記したことがある¹⁾ので、ここでは、先生の社会階級構成論と障害者統計論を中心に、先生の研究、社会活動と生活の一端を想いおこしてみたい。

I

(1)先生は、戦前から、河上肇の「階級闘争の必然性と其の必然的転化」(1926年)の影響の下に階級分析の必要を考慮しておられたが、具体的に社会階級構成の研究に着手された端緒²⁾は、1948年、「当時は日本の軍国主義が倒れてからまだ2ヶ年半足らずの時点で、空腹とインフレに皆がなやんでいました。しかし大多数の人びとは民主主義の進展に明るい希望をかけていました」³⁾頃、執筆された「飢餓線上の生活実態」⁴⁾であっ

1) 上杉正一郎、同時代を生きた大橋隆憲に、「経済」第229号、1983年5月。野沢正徳、統計学者・大橋隆憲先生を偲ぶ、同上。

2) 先生じしんのお話による。文部省科学研究費総合研究グループによる、統計学者へのインタビューの速記録、「日本における統計学の発展」第51巻(話し手・大橋隆憲)、統計数理研究所、1983年、参照。

3) 大橋隆憲、河上肇の階級闘争論、「第27回河上祭パンフレット」(1973年6月11・12・13日)、1973年6月、京大河上祭実行委員会。

た。先生はこの論文で、「国民一各グループについて」、(1)有産者階級、(2)就業労働者群（「これについては 国民経済上生産的な部面の就業者と非生産的 寄生的な 部面の就業者とを、また上層部（労働貴族）と下層部とを分けて考えるを要す。』¹⁾）、(3)失業者群、(4)要保護者群、(5)階級脱落者群（A. 浮浪児、B. 売笑婦、C. 常習の犯罪者）を区別し、国民各層の生活水準を、要保護者の生活保護費、居宅保護者の生活、収容保護者の生活、労働者階級の生活水準の順で分析したのち、さいごに、「ここに到れば強引に警察力でこの生産関係を維持するか、あるひは生産関係を変更して生産力を伸ばすかの何れかの道が残されるだけとなる。働いても働いても食えない植民地水準に経済を安定(?)せしめるか否かは、一に組織労働者の力にかかっている。』²⁾と結んでいる。とくに注目をひくのは、地域において、民生委員が有産者と労働貴族の独占するところとなり、保守政党の機関の性格を濃くもっているため、生活保護費が保守政党の投票動員のために機能していること、これに対して「要保護者の人格権の自立的確立と、民生事業の徹底的民主化が必要」³⁾であると強調したことである。また、論文末には、「『飢餓』の経済学統計集」として、(1)国民の階級区分から(29)国民生活水準にいたる29の統計がかかげられているが、これらはのちの「統計指標体系」の提起へと発展するものであった。したがって、先生のその後の経済統計論・階級構成論・社会福祉論の諸論点は、展開の萌芽をすでにこの論文のなかに内蔵していた、といえるであろう。

(2)1950年代になって、階級構成の研究は、諸氏の先駆的な研究が開始される⁴⁾が、先生は、1959年、「社会階級構成表の意義と限界」⁵⁾を発表して、諸社会階級の理論的規定にもとづき、国勢調査の職業分類と従業上の地位分類の組合わせによって人口面の階級構成表を作成する手続き＝いわゆる大橋方式を提案し、その後の階級構成の本格的研

4) 大橋隆憲、飢餓線上の生活実態——要保護者の場合——、「国民経済」第3巻第11号、1948年11月、売上社。なお、同誌の他の執筆者は、堀江邑一、平館利雄、西澤富夫、川崎巳三郎、木村禧八郎、高橋正雄、鈴木鴻一郎等の諸氏であった。

5) 同上、48ページ。

6) 同上、53ページ。

7) 同上、52ページ。

8) 1950年代以降の階級構成の研究動向については、北海道大学経済学部統計室（担当、内海庫一郎）、現代日本の階級階層構成表集成、No. 1, 2, 1969年、および、木下滋、階級構成表、「社会科学としての統計学——日本における成果と展望」1976年、産業統計研究社、を参照。

9) 大橋隆憲、社会階級構成表の意義と限界——統計にあらわれる資本家階級について——、「京大経済学部創立40周年記念・経済学論集」1959年5月、有斐閣。

をリードされた。

階級構成の研究で最も基礎的な問題は、社会階級・階層の基本的分類であるが、先生の社会階級の分類は、研究・討論の進展につれて、次第に発展するところに特徴があった。先生は、①「社会階級構成表の意義と限界」では、これに先立つ日本統計研究所の階級構成表にならい、A. 資本家階級、B. 旧中間層、C. 新中間層、D. 労働者階級に区分し、新中間層に被雇用の専門技術者・一般技術者、軍人・警官・保安サービス員をふくめていたが、②「独占資本家層再編の一紐帯」¹⁰⁾では、I 管理的職業従事者、II 高級官吏・軍人・警官、III 自営業者層、IV 雇用者・失業者を区分して、雇用者の中に専門的・技術的職業、事務員の雇用者と生産的労働者とを並べて位置づけ、③「戦後日本の階級構成と最高経営者層中核部」¹¹⁾では、A. 資本家階級、B. 自営業者層、C. 労働者階級、D. 軍人・警官・保安サービス員と区分し、労働者階級の中に、いわゆるサラリーマン層（専門的技術的職業従事者、事務従事者）、生産的労働者層、不生産的労働者層（販売従事者、サービス職業従事者）の三層を区別したのち、④「日本の階級構成」（1971年、岩波新書）において、現行の階級・階層の基本的規定（③と同じ、ただし軍人などを資本家階級の次に並べる）にたどりつく。この変遷は、先生がいわゆるサラリーマンの新中間層の現象と労働者の本質とを統一的にとらえようとする苦心さんたんの結果であり、諸氏の意見に卒直に耳を傾ける「柔軟な心」のあらわれでもあった。

先生の階級構成研究の統計方法上の特質を考えると、次の諸点があげられるであろう。第一に、先生は、社会の現実的課題にとりくむことを、政治経済学者としての自らの責務とし¹²⁾、しかも単に理論・方法次元の抽象論に安住するのではなく、統計による実

10) 大橋隆憲、独占資本家層再編の一紐帯——1962年「財界家系図」総括試論——、「経済論叢」第94巻第5号、1964年11月。

11) 大橋隆憲、戦後日本の階級構成と最高経営者層中核部、「蜷川虎三先生古稀記念・現代の経済と統計」1968年5月、有望閣。

12) 「来るべき一九七〇年の日米安保条約の「存続」または「破棄」を前にして、日本の諸階級、諸階層がいかなる現実認識の下に、いかなる動向を示しつつあるか、そしてそれらを強く規定する経済的基礎条件はどのようなものであり、また、それらはいかに変わりつつあるか、これらの事項をできるかぎりその本質的關係から明確にしておくことは、政治経済学研究者の当面の重要課題の一つである。」大橋隆憲、現代日本の階級構成——その統計による研究のために——、「経済論叢」第93巻第3号、1964年3月。

証的分析をつうじて、理論の検証・構成を一歩々々すすめよう¹³⁾とされた。第二に、先生は、統計学＝社会科学方法論説の立場にたち、階級構成研究をつうじて、統計方法を具体的に発展させようとした¹⁴⁾。その一つとして、先生は、階級・階層の数量的把握のさい、前もって必ずその理論的規定と具体的技術的規定のさまざまな試みを行っている。第三に、先生は、政府統計の批判的利用の可能性をギリギリまで追求し、つねに新しい利用形態を検討した。「就業構造基本調査」の組替えによる階級構成表の試み、「事業所統計」「法人企業統計」の規模別分類の利用、新しい「社会経済分類」の採用などである。第四に、先生は、政府統計による分析の限界をも認識し、個別資料の探索・利用によってこれを補足した。独占資本家層の分析における「高額所得者名簿」「財界家系図」、地域階級構成分析のさいの「会社年鑑」「選挙資料」などである。先生はこうして、①個人、②企業規模、企業集団と下請・系列関係、③所得・分配関係、④地域などのレベルで、階級・階層の重層的構造を可能な限り明らかにしようとしたのである。

(3)先生の階級構成研究は、「日本の階級構成」(1971年)から、「新マルクス経済学講座第6巻・戦後日本資本主義の階級構成」(1976年)へと発展するが、これは、政治経済学の内容からみても、重要な現代的課題を提起したものであった。その主要点をあげると、第一に、先生の多くの研究によって、全国・地域の経済分析における階級・階層別視点の重要性が明示され、広い影響を及ぼした。そのばあい、客観的な階級構成表の作成を基礎として、再生産構造、支配機構、イデオロギー状況をも具体的に分析し、階

13) 「われわれの階級論の理論的構成の歩みは遅々として未だ決定版に達していない。……しかし、現代階級論の諸潮流の論争が理論次元で決着のつくまで、統計資料の組替え作業が無意味であるとは思わない。むしろ、統計資料の組替え作品にこそ、その前提となる理論の馬脚が現われていて、前進の契機がある。」大橋隆憲、現代階級論の一つの潮流について——Rob Steven 氏の批判によつて——、関西大学「経済論集」第26巻第4・5合併号、1977年1月。

14) 「統計学＝社会科学方法論説の立場をとるにしても、その主要課題を、社会的実践が提起する課題解決の方法論的問題におくか、それとも、統計理論の体系化という統計学史の問題におくか、によって問題の立て方が異なってくる。私は当面、前者を重視する。それは、社会科学の基本領域において、統計方法上、未解決の具体的問題が、あまりにも多く放置されているからである。生産関係表示指標としての社会階級分類の研究も、その一つであろう。」「対象の特殊性をぬき去るのではなく、特殊性を含み込む具体的普遍の方向で方法を捉えるならば、当然に実質科学の内部へ深く入り込まねばなるまい。それがむしろ方法を具体的に規定する道なのである。」大橋隆憲、社会経済分類と社会階級分類——統計方法論争史断章——、「社会科学の方法」第9巻第6号、1976年6月、お茶の水書房。

級構造・階級対抗の総体を明らかにする視角が大切である¹⁵⁾、とされた。第二に、独占資本家層の分析において、資本所有者と資本の経済的・政治的機能代行者を資本家階級と規定し、巨大企業の代表性役員を最高経営者層中核部とする考え方は、現在の「法人資本主義」論争にかかわる重要論点の提出であった。自衛隊の人的構成¹⁶⁾の分析も、きわめて注目される。第三に、労働者階級の内部構成において、日本型労働貴族層、管理・技術・事務を担当するいわゆるサラリーマン層、公務労働者、労働者に対する技術革新の影響と小ブルジョワ的要素の流入、などの分析の課題を提起¹⁷⁾し、労働問題研究者や社会学者とも密接な共同研究を行っている。第四に、こうした具体的分析の基礎づけのため、マルクス、レーニンの階級論をはじめとして、現代資本主義における階級論の発展が志された¹⁸⁾。こうして、先生は、現代の階級分析と階級論のため、次々と新しい提起をされたのである。

(4)1974年、「現代世界の労働者階級」¹⁹⁾以後、先生の階級構成研究には、国際的視点が強くなり打たれる。

その第一は、世界の全独立国（社会主義国を除く）136ヶ国についての、階級構成表および労働者階級の組織状況の推定である。先生は、ILO, Year Book of Labour Statistics にもとづいて、開発途上国（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ）と先進国（主要6ヶ国）について、きわめて手間のかかる組替え作業によって、上記の表を作成し、その中での日本の階級構成と労働者階級の位置を示した。この作業は、アメリカ帝国主義を中軸とする世界の新植民地主義的な支配構造、とりわけ多国籍企業の支配と、帝国主義の世界支配に反対する諸勢力との対抗を、階級構成の面から示すためであった²⁰⁾。同じ視点から、先生は、S・アミンの「帝国主義体制の階級構造」（1977年）を紹介し、その「世界資本主義体制」の階級構成表——発達した資本主義的中心部による従属的周

15) 大橋隆憲、現代日本の階級構成分析の視角と方法、「新マルクス経済学講座第6巻・戦後日本資本主義の階級構成」1976年、有斐閣など。

16) 大橋隆憲、戦後日本の社会諸階級と軍隊、「経済論叢」第95巻第3号、1965年3月。

17) 大橋隆憲、戦後日本の社会構造の変化——日ソ学術シンポジウムに出席して——、「研究所報」第14号、1980年2月、日本福祉大学社会科学研究所。

18) 注15)と同じ。

19) 大橋隆憲、現代世界の労働者階級——統計による把握の問題点——、「経済論叢」第113巻第1号、1974年1月。

20) 大橋隆憲、同上、および、現代世界の階級構成と日本の地位、「新マルクス経済学講座第6巻・戦後日本資本主義の階級構成」前掲。

辺部の支配＝超過剰余労働の搾取・収奪の結果をあらわす諸階級の分析——を、自らの表と対比された²¹⁾。

第二は、先進資本主義国の階級構成・階級闘争の理論についての国際的論争の評価である。その端緒は、先生の「日本の階級構成」に対する R・スティーブン氏の直接の批判であった。スティーブン氏は、独占資本主義の下では、独占部門と非独占部門とを区別し、独占段階における搾取・収奪と階級関係の特質を明確にした階級構成表を作るべきだ、と主張したのち、「日本の階級構成の要約」を作成し、A・G・フランクの理論に依拠して、①ブルジョワ階級を独占資本家層とルンペン資本家層に分け、②新中間階級に大企業と政府の被雇者を入れ、③ルンペン・プロレタリアートとして下請会社労働者などを位置づけた²²⁾。先生は、スティーブン氏の批判には同意しつつも、ルンペン概念と大企業被雇者＝新中間階級の位置づけには懐疑的であった。先生は、この論争をきっかけに、N・ブーランツァス、E・O・ライトなどの階級理論、「ユーロ・コミュニズム」との関連で行われたフランス共産党・イギリス共産党を中心とする階級論の討論の紹介・評価に関心を広げて行かれるのである²³⁾。

II

先生は、1975年4月、京都大学を退官し日本福祉大学に移られてのち、社会福祉論、とりわけ障害者統計論に強い関心をよせ、矢つぎばやに労作を執筆された。

「かつて、といっても今から20年前、1954年7月のことである。日本労働組合総評議会は「総評シリーズ・10」で「官庁統計のぎまみをつく統計の闘い」というパンフレットを出した。……当時を思い起こすと、54年は自衛隊法が成立した年であり、いわゆる泰平安楽の55年体制の入口にあった年である。この時、総評の「統計の闘い」は、労働運動の前進に願いをこめ、労働者階級の生活に直接関係する統計をとりあげた。そして「ぎまみをからすといいくるめる政府の統計」を吟味・批判したのである。

1980年代は、既に高度成長も崩れ去り、長期不況が見込まれ、既に福祉見なおしさえ

21) 大橋隆憲、階級構成の分析目的、坂寄俊雄・塩田庄兵衛編「労働問題の今日的課題」1979年8月、有斐閣。

22) 大橋隆憲、現代階級論の一つの潮流について——Rob Steven 氏の批判によせて——、前掲。

23) 大橋隆憲・小山陽一ほか訳、A・ハント編「階級と階級構造」1979年、法律文化社。大橋隆憲、階級構成の分析目的、前掲。

唱えられている。にもかかわらず「国民の90%が中流意識をもつ」とも言われる。これは一体なにを意味するのか。この解明のため、私は、日本で基本的人権が最も軽視されている、障害者福祉関係の統計をとりあげてみたい。²⁴⁾

先生は、福祉行政の基礎となるべき厚生省統計、とくに障害者統計にたいする吟味・批判らしきものが殆んどみられない現状を、「いいかげんな統計でなにが福祉行政か」²⁵⁾と指摘され、「厚生白書・昭和56年版」における障害者数の統計の吟味・批判をつうじて、先生独自の推計値を対置された。

先生は、厚生省・障害者統計の吟味・批判においても、嵯川理論にもとづいて、障害者集団の理論的規定と統計技術的規定から出発される。まず、「国際障害者年行動計画」は、「障害」についての3側面——損傷障害、能力障害、生活障害（社会的不利）を区別した上で、「障害者集団を健常者集団と異ったニーズをもつ特別な集団と見なすべきでなく、健常者と同じ普通の人間のニーズを満たすのに、特別の困難をもつ普通の市民と見なすべきだ」²⁶⁾と規定する。そこで先生は、「国際障害者年行動計画」の規定にもとづき、障害者集団の単位の理論的規定を「能力障害者」とするが、その統計技術的規定については、「実際には量的に能力低下の程度につき、どこから障害者と見なすかをきめねばならず、それによって障害者の数は全くちがってくる」²⁷⁾とし、これらの規定にもとづいて、厚生省・障害者統計の詳細な検討をされた。厚生省と大橋推計の差を生み出す主な原因は、障害程度の判定基準で軽度障害者をふくめるか否かにあった。厚生

表 日本の障害者数—1980年²⁸⁾

障害別 推計者別	列 番号	a 身体障害者 (P)	b 精神遅滞者 (MR)	c 精神障害者 (MD)	d 難病者 (N)	e 計	f 人口比 (%)	g 人口 (千人)
昭和56年白書	1	216万人	36万人	100万人	100万人	450万人	3.9	11,517 (1978年)
厚生省の他の資料による推計（大橋推計）	2	330	328	120	100	878	7.5	11,705 (1980年)

24) 大橋隆彦, 80年代「統計の闘い」——その焦点の一つについて——, 「統計」第31巻第1号, 1980年1月, 日本統計協会。

25) 大橋隆彦, いいかげんな統計でなにが福祉行政か, 「経済」No. 244, 1982年12月。

26), 27) 大橋隆彦, 障害者統計と「社会的不利」——WHOのHandicapの評価法を中心に——, 「東京経大会誌」第125号, 1982年3月。

28) 同上論文。なおこの表は、先生の多くの論文にくりかえし引用される。

省は、障害程度の規定を客観的に規定するというより、行政の視点から、「障害程度の軽度者をできるだけ多く切りす²⁹てる、安あがり主義」³⁰⁾をとっている、と先生は怒りをこめて告発されたのである。

また、先生は、日本福祉大学の大学院生・学生とともに、労力のいる調査を2つ実施された。一つは、「都道府県別障害者概数調査」³⁰⁾であり、障害者概数の推計を府県に対する調査の積み上げで行おうとした。もう一つは、「国際障害者年に対する各宗宗教教団の活動調査——仏教系宗教団体および諸教について」であり、仏教系教団の寺院で精薄児者施設の経営を行うものは、キリスト教系教会に比してはるかに少いことが明らかにされた³¹⁾。

先生は、生活の場でも、1978年秋から1981年7月まで、心身障害者共同作業所を作り、育てる仕事に心血を注がれた。先生をはじめとする後援会、指導員の努力によって、「みやこ共同作業所」は、1979年6月、洛西バプテスト教会の京障連（京都障害児者の生活と権利を守る連絡会）事務所で第一歩を踏みだし、場所を転々としながらも、歩みつづけた。

III

先生は、幼時を回想して次のようにいわれる。「大正12年東京大震災があった。田舎でも朝鮮人がせめてくるというのでタケヤリなどを作っていた。その時、おやじが、そんな馬鹿なことは考えられない、というようなことを云った。それが村の青年団に伝わり、家が竹やりでとりかこまれ、おやじはつるしあげをくった。その光景が記憶に残り、……自分としては親父に同情したし、朝鮮人に対する連帯感がその頃から生れた様に思う。大杉栄のことも、この頃から知る様になった様に思う。したがって、社会主義については比較的早くから関心があった。」³²⁾

旧制浦和高校には、1928年から31年まで在籍したが、反戦活動などでストライキに2回加わり、無期停学を2回うけたが、何れも夏休みの終わりまでに解除された。全国農

29) 大橋隆憲、障害者統計の意味するもの(II)、「統計学」第41号、1981年9月。

30) 大橋隆憲、都道府県別障害者概数調査結果について、「日本福祉大学研究紀要」第52号、1982年6月。

31) 大橋隆憲、国際障害者年と仏教教団、「日本仏教社会福祉学会年報」第13号、1982年12月。

32) 大橋先生の自筆のメモによる。

民組合埼玉県連を、渋谷定輔氏の書記長の下で、書記補として手伝っていた。1931年末に逮捕されるが起訴留保となる。³³⁾

1932年、先生は東京大学文学部宗教学科に入学し、大学院にも進んだが、次第にファシズム化する既成仏教に批判をいただき、「戦闘的無神論者同盟」に加わる。次第に反戦・反ファシズムの運動に身を投じ、地下の非法法組織のなかでは、学生服を着た故松川七郎氏と知り合った、という³⁴⁾。1934年、治安維持法違反容疑で2回目の投獄をうけたが、再び起訴留保となった。

1937年、先生は、東京を追われ、資本論と蠅川統計学を勉強しようと思って、京都大学経済学部に入學し、蠅川ゼミナールに参加された。1940年、卒業後、すぐ助手に採用されたが、1年後の41年1月、東京との連絡者であろうとの想定でまた逮捕された。川端署にまわされた時、特高課員から、「京人への辞表を書くか、山科刑務所へ行くか」と強要され、辞表を出すことを余儀なくされた。

第2次大戦中、侵略戦争の嵐の吹きすさぶ中で、先生は、思想犯保護観察法による保護観察に付されながら³⁴⁾、日本鋼管株式会社の経理部係長として勤務した。そのかわり、蠅川教授からもらったG・V・マイヤーの大著の翻訳に没頭し、1943年、「統計学の本質と方法」として公刊された。

戦後、民主化運動の高揚のなかで、先生は日本鋼管本社労働組合の初代委員長に推され、組合結成と生産管理闘争を指導したのち、1946年3月大量解雇反対運動に敗れ、責任をとって辞職された³⁵⁾。

先生は、その後、東京工業大学講師を経て、1949年2月、京都大学に復職される。おそらく、この激動の時代を、戦争を許さず民主主義を求め、全く私心を捨てて闘い抜かれた³⁶⁾、その姿勢と意志力がこそが、戦後、いくたびもの病苦に打ちかって、統計学の研究とともに、民主主義科学者協会、京都住民のくらしを守る学者・宗教者・文化人の会、地域の障害者運動などの活動をやりぬいた、大きなエネルギーを生み出したのであろう。

33) 大橋隆憲、故松川七郎会員へのお別れのことば、「統計学」第40号、1981年3月。

34) 大橋隆憲、敗戦のころ、「獅子」(俳句文化誌)4号、1980年10月。

35) 大橋隆憲、創立当初の断想、「かがり火」No. 26(創立10周年記念号)、1956年1月24日、日本鋼管本社労組。また、朝日新聞、1946年2月5日(火)に、日本鋼管本社労組など、1万3千人のデモが、大橋委員長を先頭にして、首相官邸におしかけた、との記事がある。

36) 大橋隆憲、私の戦争体験記、「Peace Now! 私の戦争体験」第5号、1983年5月20日。